

8/16 身福

# 語り継ぐ

2016 ふくい

④

## 惨劇記した父の日記

記。父の苦悩や惨劇を知ったためだ。

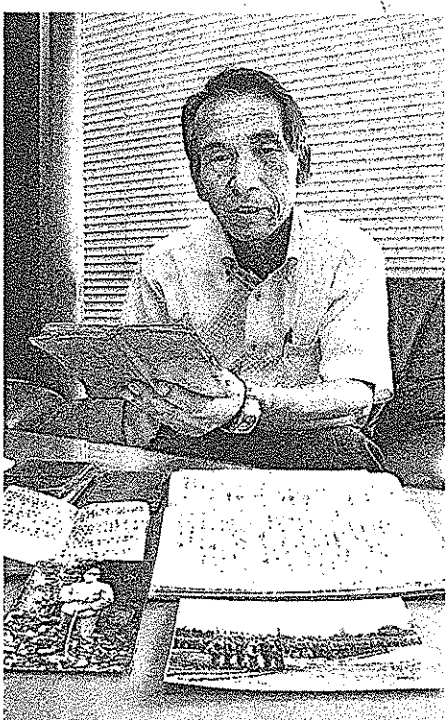
武さんは一九三四（昭和九）年九月、三六連隊に入営。上海に上陸し、激戦に

みまわれながら、南京攻略も経験した。八四年に七十歳で亡くなるまで「二度と戦争はしてはならんぞ」と口癖のように言っていた。

戦中でのいじめや食料不足などを山本さんら子どもたちに聞かせ「（戦争は）暗いつらい思い出のみ。おまえたちには、こんな経験はさせたくない」と語っていた父。戦地での出来事を包み隠さず話してくれてい

るように思えた。だが隠し続けていたことがあった。武さんは生前、孫を抱いたときに「こんなかわいい

山本 敏雄さん(67) 鯖江市



戦地での体験をつづった父・武さんの日記を手に、父の戦争体験を話す山本敏雄さん（鯖江市内）

子殺してしまった」と衝撃的な言葉を口に。理由を尋ねても教えてはくれない。答えを知ったのは亡くなつてから。武さんが宝物のように大切にしていた日記に、悲惨な出来事が記されているのを見つけた。

三八年五月二十日、中国

・徐州。軍の命令で村人を皆殺しにした。女も子どもも片っ端から突き殺した。「一度に五十人、六十人。こんな無残なやり方は生まれて初めてだ。ああ戦争はいやだ」。武さんの悲痛な叫びが記されていた。戦地での捕虜殺害の記述もあった。八

人を捕らえ、上等兵と突きまくり、瞬く間に八つの死体に。それが「心持ちが良い」と武さんは書いていた。手を合わせて拜む哀れな敗残兵を、銃剣を突き、棒で殴り、石で頭を割ってたたき殺した。「その後には、ああ戦友の敵を討つた」と、胸のすくような思いがした」とも。山本さんは「意に反しても、どんなことでもしなければいけないのが戦争。こんなこと、誰にも話せない。父は一生の間つらかったと思つ」と嘆く。自分は戦争を経験してはいないが、したくもない殺害をした父の体験を代わりに伝えることはできると信じている。「精神的におかしくなり、普通ではないことが当たり前になるのが戦争。惨劇が繰り返されること」があつてはならない」

（山口育江）